



大明小学校

校長室から

令和元年12月10日

No. 48

文責 校長 飯久保一男

親心のはずが…

「這えば立て、立てば歩めの親心」ということわざがあります。これは子どもの成長を楽しみにする親の気持ちを表していますが、そこには、親の「欲」が見えるような気がします。

産まれる前は、無事に産まれてほしい、産まれてからは、健康に育ててほしいという願いだったと思います。産まれてきてくれたことを、純粋に喜び、存在してくれているだけで、うれしかったことを私も覚えています。ところが、やがて親の「欲」が生まれてくるのです。

我が子に、できるだけつらい思いはさせたくない、幸せな人生を送ってほしいと願うのは「親心」です。そこで、運動ができたほうがいと幼児期からスイミングスクールやバレエ教室に通わせたり、小学校に入ってから苦労しないようにと幼児教室で勉強させたり…となる場合があります。こうした親の願いや働きかけは、「子どものため」という前提があるため、誰にもケチのつけようがありません。しかし、「子どものため」という「親心」であるがために、行き過ぎてしまう場合もあります。そして、「子どものため」といいながら、実は、自分の不安の解消や自己満足のために、子どもに無理なことを要求している場合も少なからずあるのです。

たとえば…、息子がサッカーをやりたいと言い出しました。お父さんもお母さんも大賛成です。さっそく、情報を集め、父も母も気に入ったサッカーのクラブチームに入れました。毎週土曜日、朝6時からの練習には、お父さんが早起きして、車で送り、練習にも付き合います。お母さんも、水分補給のための水筒を用意し、お弁当の支度に精を出します。ところが、練習に参加し始めて1カ月ほどたったある土曜日、息子が起きてきません。起こそうとすると、頭が痛いと言います。熱はありません。そこで父親が息子を怒ってしまうのです。「なんだ、たいしたことないじゃないか。父さんだって疲れてるのに、お前がサッカーやりたいって言うからつきあってるんだぞ！ しっかりしろよ！」

親に限らず、人間は、相手のためによかれと思ってやっているのにうまくいかない、腹が立つようになってきます。一生懸命努力してきたつもりの親ほど怒りは激しくなります。

こうした叱咤激励に対して、「なにくそ！」と踏ん張って乗り越えたり、やめたいことをはっきり親に伝えられたりする子は、それほどダメージを受けないのかもしれませんが、しかし、真面目で責任感の強い子どもほど、親の意向をくみとり、ガマンにガマンを重ねてしまうものなのです。「イヤだけど、イヤとは言えない」「やめたいけど、やめると言ったら親ががっかりする」など、心の中での言葉にできない葛藤が大きくなり自分では抱えきれなくなると、身体症状に現れたり、精神的な症状に現れたりするようになります。



子どもの身体症状や言動に何らかのいつもと違う感じを受けたのならば、それは、子どもからの助けを求めるメッセージかもしれません。気づいたときに、「SOSなのかも」と考えてみてください。自分の言動を振り返ってみると、「親心」という名の押しつけになっていたり、親の「欲」であったり、世間体であったりすることも多いものなのです。



小さなハーモニー

今までも何度か「やめたい」とは言っていたらしい。
しかしその翌週には「やっぱり楽しいからやる」とも。
娘（6歳）のピアノ。
まあいわば、習い事に対する子どもの定番的反応だろう。



ところが妻によれば「今度はかなり本格的」で、
先週はついにダダをこねて休んでしまったとのこと。
どうやら2カ月前の発表会で演奏予定の曲がうまく進んでいないらしいのだ。
「ちょっと聞かせてよ」
「やだ」
「前、とても上手だったよ」
「やだ、もう弾かない。発表しない」

仕方なく娘の座らぬピアノ椅子に腰かけて、その曲の譜面をたどってみた。
ポロリ、ポロリ。
何を隠そう、私も子ども時分にほんの少し習っていたのだ。
お、割といけるかな…、などと思ったのが大間違い。
結局その2分足らずの小曲をものにするため（しかも相当たどたどしく）に、
日曜日の午後をすべて費やすハメになったのだ。

夕食前、つかえつかえの演奏を披露した。
妻のお世辞をよそに、娘は感想の一つもない。
「パパでもできるんだから」と言うつもりだったが、逆効果だったかな…。

ところがさにあらず。
練習に夢中で気づかなかったが
娘は鍵盤と格闘する私の様子を時折じっと見ていたらしい。
娘が寝る前に言いに来た。
「パパ、今度のお休みの日にピアノ教えてあげるね」

花王「暮らし百景」より

師走…12月の異称です。教師も走る忙しい月、という意味ではないようです。家々で師（僧）を迎えて読経などの仏事を行うため、師が東西に忙しく走り回るため「師馳せ月」といったのを誤ったものだという説があります。年の暮れの慌ただしさと一致するため、親しまれて、習慣的に用いられているとのことでした。

